



こーひーぶれいく

コーヒーの漢字表示・ 宇田川榕菴

王 冰
Wang Bing

日本語のコーヒーブレイクとは、主に仕事や会議の途中等で、コーヒー等を飲みながらとる短い休憩時間のこと。ここでコーヒーに関わる2つの話題で休憩を取る。

「コーヒー」の漢字表記

コーヒーが日本に入ってきたのは200年程前で、当時の鎖国政策の中、唯一国交のあった和蘭陀からである。コーヒーは、1782年蘭学者志筑忠雄の訳書「萬国管窺」にある記載が初出で、1783年蘭学者林蘭梯の「紅毛本草」にある紹介記事、1804年江戸中後期の文人・狂歌師大田蜀山人の日本人初の飲用体験記「瓊浦又綴」にまで記されていたが、いずれの文献にも漢字表記は無かった。1850年代以降、和蘭陀語のkoffieの音を元に「可非」や「可否」、「黒炒豆」等漢字が当てられるようになったが、現在多く用いられるのは「珈琲」である。「珈琲」は音読みで「カハイ」あるいは「カヒ」と読み、発音の面では「可非」や「可否」等の当て字より優れていなかったが、「コーヒー」の漢字表記として定着した。何故か？優れているのは漢字の訓読みの意味するところだ。「珈」は訓読みで「かみかざり」と読み、女性の髪飾り・花簪。「琲」は訓読みで「つらぬく」、多くの玉に紐を通して作った2列の玉飾り。組み合わせて「珈琲」は「玉飾りの付いた花簪」を意味する。つまり、「珈琲」は、玉を垂れ下げた女性の花簪に似ており、コーヒーの木の枝に実った赤いコーヒーチェリーの様子を表している。また、文字の王偏は当時王侯の飲み物という高級感も出せるだろう。「珈琲」は和蘭陀語のkoffieという発音に合わせただけでなく、漢字の持つ表意性を上手く活かし、読者に異国の情緒を意識させることができる。その上外国語の単語を美しい日本語に翻訳した傑作であり、学識だけでなくその美的センスが十分に窺える着想と言える。ちなみに、koffieの漢字表記は中国では音だけに合う「咖啡」と書く。王道を取った「珈琲」が食道を選んだ「咖啡」より漢字部首の画数だけでも一本多く獲ったのだ。

宇田川榕菴

「珈琲」を初めて考案したのは幕末の蘭学者宇田川榕菴(1798-1846)である。榕菴は14歳で代々津山(美作国、現・岡山県津山市)で藩医を務める名門・宇田川家の養子となり、義父・玄真に学び知識を得て蘭学者として成長したのち、1817年津山藩医になった。また、幕府の洋書翻訳員としても活躍した。榕菴は新しい物が好きなため、玄真に随行し江戸に参府した際、カピタン(和蘭陀商館長)と面談した時に初めて飲んだコーヒーに興味を持ち、1816年に日本初となるコーヒーに関する論文「哥非乙説」で産地や効用を紹介した。そして「珈琲」という当て字を案出した。榕菴は、西洋の近代科学書物を翻訳するにあたって、当時の日本の概念に無かった学術用語の漢字を意味も含めて新たに生み出した人物でもある。例えば、1822年に著した日本で初めて西洋の植物学を紹介した植物学書「菩多尼訶経」に、「細胞」や「属」等の今日も使われている生物学用語を誕生させた。榕菴は日本に初めて本格的な植物学や科学を紹介した「近代化学の生みの親」でもあり、「遠西医方名物考補遺」(1830年～、玄真の共著)に描かれている細かなタッチの植物のイラストは榕菴が手がけた。また「酸素」や「窒素」等の元素名、「酸化」や「中和」等多数の化学基礎的用語も創った。津山藩主は徳川御家門筆頭という立場のため、幕府内でも津山の蘭学者が重用された。榕菴は蘭学に重きを置いた津山藩の藩医だったからこそ、「珈琲」を誕生させることができたのである。榕菴の命日は1846年6月22日。津山西寺町泰安寺に榕菴ら宇田川家三代の墓所があり、榕菴の業績を偲ぶことができる。命日には墓前にお酒ではなく、珈琲を供えるのは「山陽新聞」、「津山朝日新聞」にも掲載された。今月はこの光景をよく目にするだろう。ちなみに、津山市にある1917年築の城西浪漫館では、榕菴の偉業を顕彰し、江戸時代に和蘭陀を通じて日本に持ち込まれたものと同種の珈琲豆(印度尼西亚産ジャワアラビカとマンデリンのブランド)を「榕菴珈琲」として2010年7月から発売している。また、榕菴の随筆「観自在菩薩樓随筆」に登場した図から復元した珈琲罐で淹れた珈琲も楽しめる。その珈琲豆は幕末の味に近付けるために敢えて密封しておらず、紙袋(裏面は油紙)と木箱(贈答品)の2種類は持ち帰ることができる。

((国研)量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所)